



ひらひらだより

No.8. 2023. 10. 31

左手のこと

9月下旬のある朝、髪をとかしていた際に黒髪の中に白髪を発見。あ~あ...と思いながら左手でそっと頭を触り、白髪の在りかを確かめていました。その時、鏡に映る左手が、一瞬母親の左手と重なったように見え、あれっ?と思ったその瞬間、母の手にまつわる思い出が走馬灯のように私の頭に浮かびあがりました。

母は多分手の器用な人だったのだと思います。私が最初にもらったお人形は母の手作りのものでした。30~40cmほどの大きさで、丸い顔に小さな目のあっさり顔。赤茶色の細い毛糸でできた髪の毛は、私の三つ編みの練習台になっていました。お洋服ももちろん手作り。着せ替えのためのお洋服も用意されていました。

クリスマスの一か月前にはお菓子の家が毎年手作りされ、クリスマスカレンダーも母の手作りのものでした。そのほかにも手編みのセーターやパッチワークでできた大きなベッドカバーなど、今考えるとフルタイムで仕事をしていた彼女、いったいつ作っていたのだろう...私はお人形のお布団と座布団を自分で縫うために母親に裁縫を教えてもらいました。初めて針を持つ私の縫い目は荒く、あっちに向いたりこっちに向いたりしているのに対して、母の縫う縫い目は細かく均等で、それでいてなんとなく柔らかい感じがしました。子どもの私の目からは、母の手から生み出されるものは、なんだか優しい魔法でできたもののように見えました。

私は小学校に上がった時から一人部屋を与えられ、母父とは別の部屋で寝ていました。ある夜ベッドで寝ていると、お腹の痛みで目が覚めました。痛みは徐々に強くなり、冷汗が出てきました。助けを求めたくても強い痛みで声が出ず、心の中で”お母さん...お母さん...”と呼んでいると、隣の部屋から母が”どうした??”と行って飛んできてくれました。”声を出していないのに、なんで分かったんだろう?”と不思議に思いながら、母が来てくれたことで安心したのもあったのか、私のお腹をさすってくれる母の手の暖かさで、痛みが自然に和らいでいくのを感じていました。

そんな手にまつわる母親の思い出たちがふわっと浮かびあがった後、私が今、母があちらの世界に旅立った年齢と同じ歳になり数か月が過ぎたことに気が付きました。

今年のお正月、私は北インドのヴァラナシーという町にいました。ヴァラナシーのメインは何といてもガンジス川。中学生のころ、テレビで見たガンジス川の映像に衝撃を受け、そこから何となくでもガンジス川に会いに行きたいという思いから、お小遣いやお年玉を貯め、高校生の夏休みによろやく対面した時から、27年ぶりの再会でした。今回の旅は、様々な縁と偶然が重なり実現したものだったのですが、心の隅には母が亡くなった年齢を迎えるこの年に何となくガンジス川に会っておきたいと...そんな気持ちもありました。

ヴァラナシーの町は当時と比べると、町中で放牧?放町?されている牛の数がちょっと少なくなっただけかなあということ以外、あまり変わっていない印象でした。ガンジス川沿いでは、物売りや大道芸人、修行僧や物乞い、インド中世界中(流行り病のせいかな、外国の方々は少なかった印象)から集まった人びとがいました。ガンジス川の中では、身を沈めて祈る人々、若者たちは仲間同士で泳いだりふざけあったり、恋人たちは川の中で笑顔で記念撮影...そして毎朝、夕と大規模で華やかな儀式が、火と音楽と祈りとともにガンジス川のために捧げられ、そのほんの数メートル先ではインド中から運び込まれた遺体が川岸に集められ、入れ代わり立ち代わり絶えることなく火葬され、その灰はガンジス川に流されていました。”生と死”が同時に存在する景色、当時高校生の私が衝撃を受けた光景は、変わらずそこにありました。

ちなみに今回ヴァラナシー滞在中は、ガンジス川のほとりの寺院で生まれ育った生粋のヴァラナシー子(?)であり、ヒンドゥー教徒である現地の友人に案内してもらいました。彼には細い入り組んだ路地にある美味しいラッシー屋さんから、何とも個性的な寺院などなど、いろいろな場所に連れていってもらい本当に楽しかった!

最後の滞在日、朝日が昇るのと同じ時間に、一人でガンジス川のほとりを歩いてました。歩きながらたゆたゆと流れる川を眺めていると、今回のインドの旅が実現できたことへの感謝が、心の中にふつと湧いてきました。そしてそこから蓋が外れたように、私の中から湧き水のようにある感情があふれ出てきました。それは、今ある私が様々な縁により繋がりに存在していること、そしてそれ自体が大きな奇跡であること...私が”在る”という当たり前の奇跡への感謝でした。そしてこの溢れ出てきて止まらない感謝をどうしようか...この感謝をガンジス川にお返ししたい(なんでか知らんが!)と思ったときに、自然と川の中に入っていき自分がいました。そして、そこにたまたま居合わせたインド人の母娘の親子に沐浴_ガンジス川での清めのお祈り_の仕方を教えてもらいながら、インド人のお母さんと一緒に何度も何度も川に全身を沈めました。そして見よう見まねで朝日に手を合わせながら、”祈る”ことは生かされている私たちができる感謝の表現なんだと思いました。

インドの旅から戻ってきて 10 か月が経ち、その間に私はさらっと母の年を越しました。そして一か月前のあの朝より、自分の左手を見ると母を思い出すことが多くなりました。いや、思い出すというより、私の左手の中に母の存在が在る、と表現したほうが良いかもしれません。そしてそれと同時になぜか、あのガンジス川が思い浮かびます。生と死を同時にのみこんで悠々と流れるガンジス川と母の手が、歳を重ねていく私に、”これでいいんだ”と言ってくれているような...そんな感じがしています。

: 小林郁絵

木林と絵本と巡る季節

11月

森の木々もずいぶんと色づいてきて、朝晩はひんやり、あたたかい毛糸のでぶくろや帽子が恋しい季節となりましたね。今月ご紹介する絵本はそんな季節にぴったりの美しいおちばとでぶくろにまつて「もりのてぶくろ」八白板洋子ぶん/ナターリヤ・チャルーシナエ(福音館)

…静かな森におちていた1枚のはっぱ、森の動物たちが続々とやってきて、「わあ、きれいなはっぱだね」「お、すてきなはっぱ」と自分の手をはっぱにあててみます。でも大きすぎたり、小さすぎたり…するとそこへお母さんと一緒にきのこがりをしていた男の子が通りかかって…

というお話なのですが…

絵をかかれていますナターリヤ・チャルーシナさんは

ロシアの画家さんで、お祖父さん、お父さんと

動物画家にそいで、ナターリヤさんも動物や自然

の絵がとても繊細で美しく、他にもいくつもの絵本

を手がけられています。どれも鮮やかでみているだけで森へ

でかけたいくなる素敵な本です。みなさんもぜひ

この絵本の親子のように自分だけの葉っぱの

てぶくろや、きのこをみつけに森に

でかけてみるのも楽しいかもしれません。

そしてこの1冊は、落ち葉の森でやってみて!

びびの子はらもちや。おらばのプールにグワッサーン! おらばを一本中で楽しむ絵本

「おらばシャッシャッ」高柳芳恵ぶん/たのさわまきこえ(福音館)です。

落ち葉の森を¹はいてシャッ シャッ

とまてジャジャ すき、ぶすき、ぶ シャッカ シャッ

シャッカ シャッ! じゃーんぶに じゃん じゃん ぶ

娘と森を歩くと、お娘は自然におらばの

にくさんある方へ歩き、絵本のようにおらばの

音を楽しんでいき、そしてまもなく木枯らし風が

澄んだ青空に美しい木々の葉が舞い、子どもたちが

歓声をあげて追いかける。一瞬のことだけれども美しい…そんな日々がやってきましたね。

葉々恵



たはたたより

新米まつりお知らせ

先日は、気持ちのよいお天気の中、稲刈りを無事終えることができました。
ひろひろのみなんで 4又穫のときを過ごせて、とても嬉しい時間でした。

ご+あかを ありがとうございます！

そんな 4又穫したての ひろひろの新米を飯ごうで炊いて、
この秋の実りを 親子一緒に お祝いしましょう。

今年の新米まつりでは、「ひろひろに軽トラを!!」の夢に向かう募金
活動の一環で、大人の皆さんの参加費を軽トラ購入資金に充てさせ
ていたきたいと思います。また、新米まつりの午後の部では、ひろひろの
森に色々なお店がオープンします。みなさんにお買い物をしていた
だいた売上げから軽トラの購入資金にご寄付いただく予定です。

ひろひろの暮らしがまた少し豊かになるように、夢の実現に向かう
一日として楽しんでいただけたら嬉しく思います。

日時 11月14日(火) ※雨天開催

集合 9:00 ~ 9:15
お店閉店 15:00 ごろ

場所 ひろひろの森

持ちもの ・水筒 ・必要な食器
・軍手 ・マスク

・大人 ひろひろ 1,000 円の参加費

（ランチ おかわり自由、
ひろひろ米のおみやげつき）

メニュー



- 新米
- まゆさん特製ふりかけ
- ちょうこさん特製おつけもの
- 豚汁
- 新もち米でおもち
(きなこや あんこなど)



11月7日(火) 朝までに、大人の参加人数を

黒板近くにある紙にご記入をお願いたします。

